



## 〈女作者〉 田村俊子論

高田, 晴美

---

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2011-03-25

(Date of Publication)

2012-03-19

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲5358

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005358>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



## 論文内容の要旨

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

〈女作者〉田村俊子論

氏名：高田 晴美

神戸大学大学院文化科学研究科文化構造専攻（博士課程）

指導教員氏名 (主) 林原 純生 教授  
(副) 福長 進 教授  
(副) 樋口 大祐 准教授

(注) 4, 000字程度（日本語による）。必ずページを付けること。

博士論文要旨

〈女作者〉田村俊子論

神戸大学文化科学研究科文化構造専攻（博士課程）

高田 晴美

田村俊子は明治末期から大正初期にかけて文壇の第一線で活躍した女性作家である。昭和二十年に亡くなるまで、何らかの形で文学活動は続けられたが、流行作家としての時期は短かった。しかしその間に多くの華々しい作品を発表し、存在を忘れられては復活するというのを幾度も繰り返しながらも分析し、評価する価値がある作家として取り上げられてきた。また、田村俊子の最盛期を過ぎてからも、大正期、昭和期と特に女流作家たちの中に大きな存在感と深い印象を残し、そして女が作家をやるといこと、文学をやるといことについての問題を考えさせた先達という意味でも、文学史上重要な作家と言うことができよう。

田村俊子の作品では、いわゆる〈男女両性の相剋〉モノといわれる男女（基本的に夫婦）の争闘を描いた作品群が特に有名であり、作品としても優れているものも多い。その殆どは田村俊子と夫田村松魚をモデルに描かれており、争闘、闘争と言っても単なる言い争いのレベルではなく、例えば表面的な現象としては近所の目を憚るほどの打ち据えあう乱闘にまで発展するような壮絶な闘争場面が含まれることなどに特徴がある。なお、〈両性の相剋〉モノと言われるが、主人公は常に女である。主人公の女が男とどう闘争するかが語られる小説なので、自然主義の一元描写的であると言えなくもない。描写の見ようによっては醜悪な生々しさであったり、男女の争闘を極めることをテーマとしているあたり、田村俊子のことを〈女岩野泡鳴〉と称してもいい気がするくらいである。

これまで田村俊子の作品について語られるとき、同時代においても現代においても、「官能」、「感覚」描写といった表現内容な、その表現の技巧的であることについて取りざたされ、それが俊子作品の特徴として語られることが多かった。作品中の女の化粧という行為や、「肉」「血」などの身体的性的表現、衣類や小物に関する細やかな描写、恋愛における情緒など、〈女性らしい〉〈女ならではの〉表現に価値を見出されてきた。俊子自身の放縦な行為とも重ね合わされて、女性作家ならではの表現ともてはやされたのだ。ある意味、過剰な〈女性性〉を読み取ってきたのだといえる。

はたまた、〈相剋〉物は、その〈両性の相剋〉というテーマ性からも、また、俊子の活躍時期が明治末年からの〈新しい女〉の登場や『青鞥』創刊などに代表される婦人問題の隆興の時期とほぼ重なることから、女性の自我などの観点からフェミニズム批評的に読まれることも多かった。〈女らしい〉とともに、同時に強烈な〈自我〉をも主張する女主人公に〈新しい女〉の像を見て、俊子作品を〈両性の相剋〉などと判ったような名で称して、具体的な〈相剋〉の内容は見ず、感覚描写の煌びやかさ、思想の激烈さに惑わされて扱われてきたように思われる。

一九八〇年代の終わりに『田村俊子作品集』（全三巻、オリジン出版センター）が刊行されて、ようやく代表作が一般に読めるようになり、ここ十数年ほどでやっと田村俊子研究が進んできたが、それも次第にマンネリ化が進み、型にはまった、もしくは微細なことばかりに目を向けて本質を捉えきれない論が多くなり、田村俊子研究が閉塞的かつ縮こまったつまらないものになってきつつあるというのが現在の状況である。まだ俊子作品を主にテーマ性から論じる段階にとどまっており、作品論としての個々の作品の具体的な読みにしても、そして作家、いや〈女作者〉田村俊子という本丸に攻め入るような作家論にしても、不十分の感があるように思われてならない。田村俊子という作家とその作品は、同時代でも現代でも、もっと刺激的で過激であるはずなのである。

本論文は二部構成をとる。第Ⅰ部「男女の争闘を書くということ」では、田村俊子の最盛期の中でも〈両性の相剋〉モノの系譜にある作品を取り上げて、田村俊子が男女の争闘を如何に自分の最大のテーマとし、それを掘り下げていったか、そしてそれは当時においてどれほど衝撃的で意味のあるものであったかについて、作品群のその始まりから頂点までを追っていく。

第一章では「生血」を取り上げる。当時、いわゆる〈新しい女〉と〈新しい男〉(?)が自由恋愛をするにおいても、家族制度や家父長制には縛られない道を模索して自己実現するための恋愛だったにも関わらず、女の貞操と体を男に許すということ自体を重要事項として捉え、場合によっては切り札のように見なされることが多かったし、大正期に入ってから「貞操論争」も起こったりして、何かと女の貞操や処女性、処女喪失は大きな問題とされていた中、田村俊子は処女喪失をいかに描いたか。真の深い男女関係の始まりを田村俊子はどのように書き表したか。そして、田村俊子作品の女主人公にとって、処女喪失とはどのようなものであるべきだったかを、「生血」という作品中の、主人公ゆう子が金魚を針で貫くという衝撃的な場面を中心に取り上げることで論じる。

第二章では「魔」を取り上げる。結婚して数年、倦怠期にあると見受けられる夫婦。その妻である主人公龍子のもとに年若い青年から恋文めいた手紙が来る。それに浮気心を擦られたり、それをダシに夫と馴れ合おうとしたりしながら、次第に夫婦という男女の争闘の様相を呈していく過程を、作品を細かく見ていくことで確認し、女主人公の争闘への志向のあり方と、争闘へと状況を転じさせていく技巧について、それがもたらす効果と意味について考察する。

第三章では「炮烙の刑」を取り上げる。この作品は、「魔」をさらに発展させた設定となっており、冒頭から女主人公龍子と夫は、龍子の浮気が発覚して激しい争いをした後という設定である。「魔」では妄想でしかなかった第三者である青年との浮気が実際のものとなったとき、夫婦の争闘はいかなる様相を呈するか。そこまでの激烈な争闘をしてまで女主人公が希求するものは何か。「炮烙の刑」という田村俊子の〈両性の相剋〉モノの頂点ともいうべき作品を論じることで、田村俊子文学の真髓を明らかにすることが目的である。

第Ⅱ部「〈女作者〉というあり方」では、〈女作者〉をキーワードに、田村俊子という作家のあり方について論じる。一体、田村俊子とは作家として〈女作者〉としていかなる存在であり、その存在意義はどれほどのものであったのか。また、〈女〉が作家として身を立て、物を書いていくとはどのようなことであったのか。日本近代初の小説家として生計を立てることができた女性作家として、田村俊子自身にも相当の自負や気概があったであろうし、男性作家には浅いものとして想像する程度しかできないような煩悶があったはずである。それを田村俊子という〈女作者〉はどのように考え、表明したか。田村俊子の作家論として迫るとともに、近代に入ってから連続と続く女が小説を書くこと、小説家として生きるということの問題を解明するための一つの手がかりを提示したい。

第四章では、田村俊子が女性作家として唯一の先達とも言える一葉についてどのように語ったかを見ていく。〈新しい女〉ブームの中にあつてちょうど一葉全集が刊行され、男性文人だけでなく当然〈新しい女〉たちも一葉について、専ら旧い女、思想的に遅れている女、自分たちが乗り越え捨て去るべき女として論じる文章を発表していく中、田村俊子だけがそれとは異なる位相で一葉を論じた。そこには、作家として身を立てる田村俊子だからこその視点と〈女作者〉として突きつけないではいられない思いが見える。文学史的にも一葉を継ぐものとして見るべきかもしれない田村俊子の〈女作者〉観について考察する。

第五章ではいよいよ、田村俊子と呼び表すための代名詞としてしばしば用いられる〈女作者〉がそのままタイトルとなった作品「女作者」を取り上げる。安易に田村俊子を象徴する言い方として使われてきた〈女作者〉であるが、一体〈女作者〉とはどのような存在であるのか。それを田村俊子はどのように作品化したか。そして、田村俊子が求める文学とはどのような世界をどのように描くことであったか。作家としての田村俊子の深淵に迫ることを目指したい。

論文審査の結果の要旨

氏 名	高田 晴美
論文題目	〈女作者〉田村俊子論
要 旨	<p>本論文は、田村俊子の文学を読み直し、これまでの研究史においてその評価が固定化した観のある彼女の文学を論じて、新たな地平を拓いたものであり、その視点と論旨は、刺激的かつ斬新であり、従来の田村俊子研究を確実に進展させたものである。以下、章を追って要旨を述べる。</p> <p>第一部第一章は、これまでの田村俊子研究を批判的に展望して、この明治末期から大正初期の短い間に（男女両性の相克）物、つまり男女の争闘をテーマとして注目された文学者の評価は、専ら女性特有とされる感覚、神経描写がその作品の個性として評価され、後年にはフェミニズム批評の登場によって、男性や社会システムに対する異議申立てと評価されることを指摘し、その双方の評価軸においてのみ文学史において言及される田村俊子と作品に、新たな読みを提示する。「青鞥」創刊号に掲載された「生血」における金魚殺しの描写について、従来は「蹂躪する男」と「蹂躪される女」という関係の端的な表現という解釈が行われてきたが、主人公ゆう子が金魚を殺し、さらに、そのピンによって自分の人差し指を傷つけ血を流す描写を克明に分析し、この一連の描写の過程には、初めての性交渉を持った女性が、それを契機として、自己の処女性を自己によって蹂躪したとし、そうすることによってゆう子は、男性を今度は蹂躪してゆく暴力的とも言える官能性とその官能を欲望する主体を自覚的に獲得した女性とする。さらに、その独自性は同時代の「新しい女」とは異なつたため、この作品が「青鞥」に発表されたにも関わらず、『青鞥小説集』には集録されなかつたとする。本章は、田村俊子「生血」を、日本近代の観念や思想世界のシステムや家、夫婦という制度を、それこそ争闘の場とし、その争闘を通して男女の関係を、近代的な価値体に基づくものとは異なる根元的な人間関係へと変貌させようとする田村俊子の文学世界の、その初期の表現を析出して新たな知見をもたらしている。</p> <p>第二章「魔」論は、これまであまり注目されることのなかつたこの作品を田村俊子の文学を考察するうえでの重要な作品とみなす。女性三人のなげない会話から、突然、他の二人とは違う自分の中にある「浮気血」の魔性を発動させることに気づけ、自分の読者である若い青年の恋の手紙を夫に見せ、それを無視するかのような夫の姿勢を察知して、そのような夫から、技巧的とも言える態度を取ることによって自分への反感を煽り、さらにその反感から、夫と妻という関係を越えた男女の争闘というドラマを構築して行く、その争闘の始まる刹那の瞬間を本章では的確に分析している。なお、「生血」では、専らゆう子の視点からの叙述であつたものが、本作品においては二人の女友達、夫類三、その妻である鴛子のおのの内面が描写されることによって、男を挑発する女性の自己満足として読まれる傾向のあつた「生血」に比べて、本作品には小説空間の広がり、田村俊子の文学の主題の深化を見る論旨は、説得力を持つ。</p> <p>第三章は『「炮烙の刑」論』として、「魔」の後日談とも言える「炮烙の刑」を論じる。本章では、この作品の登場する「奇蹟」という言葉を検証することによって、「炮烙の刑」に描かれたものは、男女の究極の状態、〈相克〉が成就される瞬間であり、女性が「炮烙の刑」を受け入れることが可能な形で男性、それを本章では男性が所属する制度や男性原理から解放された男性とする、を得た瞬間を「奇蹟」として表現したとする。本論文の</p>

主査記載 氏名・印	林原純生
--------------	------

以上の三章は、従来の田村俊子研究の枠組みを超えて、彼女の作品を日本の近代文学の独自の成果として論証して重要である。

第三章までは、田村俊子の小説が、その独自の表現力が充溢した場面を丹念に読解した成果であるが、第四章以下は、彼女の文学史的な位置について論じる。

第四章「田村俊子の一葉論」は、明治四十年代の樋口一葉評価を調査して、田村俊子における樋口一葉評価の意味を検討する。同時代の樋口一葉に対する平塚らいていや与謝野晶子等の古い女としての一葉への嫌悪感と脱一葉崇拜、反一葉崇拜という状況に対して、田村俊子の「私の考へた一葉女史」には、一葉を伝統的な家に生まれた女性としながら、他方では一葉にそれまでの一葉論には見られない「放縦な気分」を読み取っていること、さらに、同じ一葉論では、一葉を「蹂躪の意気」を持つ女性と表現していることに注目し、このような語句によって表現される一葉観は、田村俊子自身の考える女性の文学者の本来のありようを投影したものであるとし、そこには単に女性の自己表現や女性の文学者としてではない、〈女作者〉としての自己を確立して行こうとする田村俊子の志向を見ることができるとする。本章では、明治末期から大正初めにおける新しい女を巡る多くの発言を比較・検討し、田村俊子と与謝野晶子への否定的評価を通して、田村俊子と与謝野晶子の相違を明らかに、同時に〈女作者〉という田村俊子の独自の文学者観が生れる歴史状況を的確に展望している。

第五章『「女作者」論』は、前章の問題提起を受けて、田村俊子の小説「女作者」を論じる。同時代に平塚らいてうが（新しい女）の宣言をした直後に、田村俊子が敢えて〈女作者〉という文学者を「女作者」で描いたことを、本章では、田村俊子の（新しい女）に対する彼女の意見表明であるとし、田村俊子の与謝野晶子評価を再検討した後、田村俊子が与謝野晶子を決して晶子女史とは呼ばず、晶子夫人と記述していること、晶子を「薄ぎぬで現実の社会と御自分の生活とを立派に区切つてゐられるような」人間としていることを分析し、さらに「女作者」での、「白粉をつけても、何も書くことが出てこない」〈女作者〉の描写を分析して、田村俊子の「女作者」という作品には、それまでの女性作者とは違う全く別個の、しかし全人的な文学者の理念が表明されており、この作品にはそのような〈女作者〉へと変貌しようとする田村俊子の意志を見ることができるとする。

以上のように、本論文は、田村俊子の作品と彼女の生きた時代を詳細に分析して、田村俊子の文学営為に、新たな日本近代文学の可能性を読み取る試みである。田村俊子が同時代の人に「女岩野泡鳴」と呼ばれたことから理解できるように、田村俊子と岩野泡鳴の作品には共通点があり、その共通点はこれまでの文学史的な記述では十分に解明されているとは言えない。また、その解明を目指した研究も少なく、重要な研究課題となつていた。本論文は、田村俊子の作品と時代を丁寧に検証することで、その研究課題の重要性を改めて確認させる新しい視点と問題提起を備えた論考であり、田村俊子研究の優れた成果と言えよう。

以上の審査結果に鑑み、本審査委員会は論文提出者高田晴美が博士（文学）の学位を授与するに足る資格を持つとの結論を得た。

審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	林原純生
副査	教授	福長 進
副査	准教授	田中康二